View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai Gaidai University Repository

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

「解放」のディスクール : ストウ文学とdomesticity

著者	森岡 裕一
雑誌名	研究論集
巻	108
ページ	237-255
発行年	2018-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007830/

関西外国語大学 研究論集 第108号（2018年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.108 (September 2018)

「解放」のディスクール
── ストウ文学と domesticity * ──

森　岡　裕　一

要　旨

19世紀アメリカの社会改革運動を代表する、奴隷制度廃止、禁酒運動、婦人参政権獲得の三大「解放」運動のいずれにも関与し、それを材料に多くの作品を残したハリエット・ストウの言説の特徴を整理し、それらに共通する思想的背景を探る。それぞれのジャンルを代表する作品を分析する過程で浮かび上がるのは、宗教的、政治的、感傷的、実際的といったさまざまな面をあわせ持ちながら、ストウの原点に、理想の家庭構築への強い意欲がつねに存在していたことである。また、それはストウの個人的体験に根ざしたものであり、彼女の人生と文学が深く絡み合ったところに一つの特徴が見て取れる。

キーワード：ドメスティシティ、奴隷物語、禁酒物語、女性問題

19世紀アメリカの社会改革運動で文学と関わりが深いものは三つある。一つめの奴隷制廃止運動は南北戦争中の1863年に奴隷解放宣言が出されたのち、1865年の憲法修正第13条により制度が撤廃されその目的をはたした。つぎに禁酒運動は、メイン法など州単位の禁酒法の制定を経て、1919年に成立した修正第18条により1920年から1933年にわたり全米で禁酒を実現させた。最後に婦人参政権運動は、禁酒法に続き、女性の投票権を認めた1920年の修正第19条として結実している。

奴隷制撤廃は奴隷の解放をめざし、禁酒運動は大量飲酒者およびその家族の酒害からの解放を目的とし、そして婦人参政権運動はたんに政治参加にとどまらず、女性の財産権、離婚権や、女子教育の充実などを含む女性の解放運動であった。これら三つの解放運動は、担い手が女性や教会関係者などが多く、活動家の顔ぶれをみても相互に深く関わっている。なかでも三つの解放運動すべてにコミットし、また文学的実践においてそれらを題材に多くの作品を残した人物の代表格がハリエット・ストウである。本稿は、ストウの「解放」言説（ディスクール）の特徴を整理し、それらに共通する思想的背景を探ることを目的とする。

三つの運動において解放されるべき対象がどのようにとらえられていたかについて簡単にみ

ておきたい。まず大量飲酒者は当時「囚われの身、つまり、アルコールに鎖でつながれ、悪魔の酒（Demon Rum）に拘束された」（ロラボー、200）存在と見なされていた。アルコール王（King Alcohol）という言葉も同様に使われており、大量飲酒者すなわち奴隷という認識が定着していた。1840年に始まった大量飲酒者による自助運動がワシントニアン運動として知られるのも、英国王の圧政から植民地を解放に導いたジョージ・ワシントンにちなんだことによる。

19世紀の禁酒運動家の一人ジェシー・グッドリッチは1841年に「第二独立宣言、あるいは合衆国ワシントニアン絶対禁酒協会宣言」なる興味深い文章を書いている（ブルームバーグ、96、以下引用はすべて拙訳）。

> われわれは次の真理を自明のことと考える。すなわち、すべての人間は神によって禁酒家として造られており、一定の自然な欲望を授けられている。そのなかには、冷たい水への要求、そして幸福の追求が含まれている。

一読して明らかなように独立宣言（1776）のパロディである。ところが、1848年ニューヨーク州セネカ・フォールズで開かれた女性の権利のための集会で採択された文書が、次の引用で始まる『所感の宣言』（Declaration of Sentiments）である。

> 人類の歴史の過程において、人類のなかの一部の者が、これまで占めてきた位置とは異なるものの、自然法および自然の神が与える位置を地上の人々の中で占めることが必要になる時、人の意見を尊重する立場からは、そのような経過に至った理由を宣言しなければならない。

こちらも独立宣言を下敷きにした文書となっていることが容易に見てとれる。大量飲酒者と女性がともに囚われの身として描かれており、両者ともに、英国の植民地支配の犠牲者の立場、すなわち隷属状態から解放され独立をはたしたアメリカ合衆国の起源になぞらえて表象されている。「女性＝奴隷の類比は南北戦争以前の女性解放論議でもっとも頻繁に用いられたもの」（ハーシュ、196）という意見もあり、また、『アンクル・トムの小屋』においてストウは、イライザの奇跡的脱出劇を書きこむことで、解放物語を女性化（feminized）した（ヘドリック、212）との見方もある。禁酒物語論の立場から黒人奴隷、大量飲酒者、女性の置かれた関係をまとめると、「奴隷制廃止論者にとっては、南部黒人の隷属状態は、大量飲酒者のボトルへの隷従と比喩的に対応している。女性解放論者にとって、女性に対する男性の不当な取り扱いは、離婚の法的困難さゆえ酔っぱらいの亭主から逃れられず虐待され抑圧された妻のイメージでしばしば表された」（レノルズ、５）となるだろう。

上記三つの運動とその言説の鍵となる共通項が支配・抑圧からの「解放」であるなら、はたしてストウはそれをいかなる文学表象で表現したのか。それを以下で具体的に探っていくことになるが、まず本稿で対象とした作品を三つの運動と関連づけて最初に紹介しておくことにする。奴隷解放（以下、奴隷物語）については1852年出版の『アンクル・トムの小屋』と1856年刊の『ドレッド』に尽きる。大量飲酒者の解放（以下、禁酒物語）に関しては、「イーノックおじさん」（1835）に始まり「ベティのすばらしい考え」（1876）にいたる6編の短編が該当する。また、すでに別の論文で示したように（森岡「ボトルと奴隷」）、『アンクル・トムの小屋』も十分、禁酒物語として読むことができるうえに、『ドレッド』においてですら禁酒物語を読み込む試みもある（ハミルトン）。女性解放（以下、女性物語）としては、『牧師の結婚』（1859）、『オア島の真珠』（1862）のニューイングランドを舞台とした作品から、『妻とわたし』（1871）、『われわれと隣人たち』（1875）のニューヨークが舞台の後期小説、および『家事に関するエッセイ（*Household Papers*）』（1865-7）,『アメリカ女性の家』（1869）が該当する。奴隷、禁酒、女性という三つの主題に寄せるストウの関心が高いものであったことは、このリストからも十分に理解されうるだろうが、同時にその関心は、後でみるようにいずれもストウ自身の個人的体験に根ざしたものであり、彼女の人生と文学が深く絡み合ったところに一つの特徴が見てとれる。

『アンクル・トムの小屋』はストウの代表作であり、ストウ研究の大半がこの作品に集中している。先行研究は多岐にわたるが、意外に軽視されているように思えることは、ストウが反奴隷制のメッセージを物語化するにあたり、夫婦、親子の別離と再会を軸とした家庭ドラマの体裁をとった点である。子供を売られた絶望感から入水自殺したルーシー、子供の死を防げなかった罪悪感に苛まれるプリュー、奴隷の子としての将来をはかなんで自ら息子に手をかけたキャシー等、幸せな母子関係を樹立できなかった黒人女性たちがいるかと思うと、トムとクロゥイ夫婦は引き裂かれ、トムは再会をはたすことなく死に果てる。また、作品前半で印象的な役割をはたすイライザは、売り払われようとした息子を助けるために夫ジョージをおいてカナダへの逃亡を余儀なくされる。黒人家庭の分断と親子関係の崩壊物語を通じて、奴隷制の残酷さが浮き彫りになっている。

しかし、ストウは悲劇的な現実を告発する反面、同時に希望と救済のハッピーエンドを書き加えることも忘れなかった。イライザとジョージ夫妻はカナダで無事再会し、息子ハリーともどもアフリカで幸せな家庭生活を送ることになる。またキャシーは、子殺しという地獄の体験を経たあげく、最終的にイライザが実の娘であることを知り家族を取り戻す展開となる。ニューイングランド出身の白人中年独身女性オフィーリアは、手のつけられない黒人の孤児トプシーに教育を施し、故郷のバーモントに連れ帰った際トプシーは、「家族や近所の人にかわ

いがられ、「私たちの一員」として迎え入れられるようになった」(377) と書かれているように、ここにも一組の疑似家族の関係が成立している。

トム、クロゥイ夫婦は現実には永遠に引き裂かれたままである。だが、作品最後で、かつての主人の息子ジョージは自分が引き継いだ農園の奴隷を解放すると誓ったのち、みなに「トムの小屋」を心にとめ、クロゥイやその子供たちに礼を尽くそうと呼びかける。トムは死してのちもその高潔さゆえの影響力で妻と子供たち家族を守り続けているとも言える。「小屋(cabin)」とはすなわち家庭の謂いであり、主人不在のなかにあって「トムの小屋＝家庭」は継続維持されることが示唆されている。

そうしたドラマの造形の背後にストウの伝記上の事実がある。1849年、わずか一歳半の息子チャーリーをストウは病で亡くす。その後に生まれたチャールズ・エドワードらがのちに編集したストウの伝記に引用されている書簡には、「私は七人の子供の母親でした。なかで一番可愛く一番愛された子は、シンシナチーの家の近くで眠っています。わたしが哀れな奴隷の母親が子供を奪い去られるときの気持ちを知ったのは、あの子の臨終のベッドとあの子のお墓のところだったのです」(チャールズ・ストウ、154) と記されている。ジョウン・ヘドリックは、イライザが無事幼い子供を守れたプロットが、チャーリーを無くした喪失感を埋めたいというストウの欲求によってもたらされたと言う (ヘドリック、214)。

家庭の大切さとそれを守るための女性の連帯が、ストウにとっては奴隷制度と同程度に重要な主題であったように思える。分量的にも、白人主人と黒人奴隷の交渉を描いた部分に対抗するかのように書きこまれているのが夫婦の話である。残忍な南部の主人リグリーと奴隷かつ愛人キャシーの疑似夫婦まで入れると、主なものだけで、トム／クロゥイ、シェルビー夫妻、ジョージ／イライザ、バード夫妻、ハリディ夫妻、オーガスティン／マリーなど七組の男女の織り成す物語が『アンクル・トムの小屋』なのだ。夫婦の主題は後で分析するニューイングランドやニューヨークを舞台とした小説群の中心主題であり、反奴隷制という政治色の強いこの作品にあっても、すでに家庭という空間に寄せるストウの執着がかいま見られる。『アンクル・トムの小屋』における家庭を背景にした女性たちの連帯と男女の力学については別の論文 (森岡「リグリーの怯え」) に書いたのでここでは省略するが、反奴隷制の代表的作品として有名なこの小説における家庭 (domesticity) の主題の重要性をあらためて確認しておきたい。

ストウの奴隷物語の二作目『ドレッド』は概して評判が悪い。北カロライナ大学版の編者ルヴィーンはこの小説が『アンクル・トムの小屋』ほど「整然としておらず首尾一貫性もない」(ルヴィーン、10) と言っているし、「失敗作」と断言する批評家もいる (クロージアー、52)。また、「『ドレッド』には必要不可欠な生命力が欠けている」(アダムズ、41) という意見もある。原因のひとつは作品構成の不備にあるだろう。前作のトムとは対照的に武装蜂起をめざし闘う黒人であるはずの主人公は、二部構成のこの長編において第一部の四分の三を過ぎて初め

て登場するうえに、最終的に結局反乱をおこせないままあっけなく殺害されてしまう。一方、第一部の事実上の主役である農園の女主人ニーナも、第二部の三分の一を少し過ぎた場面で病死してしまうのだ。たしかに『アンクル・トムの小屋』でも前半はイライザの逃亡劇にスポットが当たりトムが姿を現す場面は少ない。だが、イライザとトムの物語が並置されることで、黒人奴隷の異なる運命が対比的に描きだされており、両者の物語のあいだに断絶はなく、むしろトムの悲劇性がその分高まっている。

二作品の対比を続けると、中心人物をめぐるプロットもよく似ている。主人公のトム、そしてドレッド、ニーナが死に、前作ではイライザ―ジョージ、そして第二作ではジョゼット―ハリーの二組の夫婦がハッピーエンドを迎えることになる。残されたトムの妻クロゥイに匹敵するのが、ニーナの意志を引き継ぐ婚約者クレイトンである。やはり、この作品でも、奴隷制の非人間性を批判しつつ、家族の絆の維持を願うストウの思いが反映されているものと考えられる。

では、表題についてはどうだろうか。『アンクル・トムの小屋』の持つ意味については既にふれたように、家族、家庭が存在の基盤であることが表題に示唆されていた。『ドレッド』の方はどうかと考えるとき、その副題『大ディズマル湿地の物語（*A Tale of Great Dismal Swamp*）』が目をひく。大ディズマル湿地とは、ヴァージニア南東から北カロライナ北東にかけての湿原地帯のことで、ドレッドが拠点とし、逃亡奴隷たちが一時身をひそめる場所である。奇妙なことに、この一見居住には不適切な場所は、次の引用にあるようにあたかも快適な暮らしをもたらす家のイメージで描かれている。

> 彼（＝ドレッド）は自然と完全に共感、調和し、とりわけ湿原で彼をとりまく自然環境とそうであったがために、家庭の婦人がトルコ絨毯の上を踏み歩くがごとく、やすやすとその中を動き回った（274）。

また、湿原めざして逃亡してきた奴隷たちが初めて見たドレッドの住む空間は次のように描写される。

> 一時頃に彼らは絡み合った低木の茂みを抜け、小さな空き地に出た。そこにはかぐわしいゴムの木からブドウの蔓が葉綱のように垂れ下がり、一種あずまやのような趣であった。満月が静かにあたりを照らし、そよ風がブドウの葉をゆらし、他の透明感あふれる緑の葉のうえに影をおとしていた（406）。

古典的な「心地よき場所」のトポスが典型的に描出されており、湿原は、まさに、快適な家庭

空間として認識されていると言ってもよい。したがって、「ストウは湿原がドレッドに導かれる奴隷のコミュニティにとって家庭的な（domestic）空間であることを強調している」（クーン、497）という意見が出されるのも無理はない。

同じ逃亡奴隷の立場でも、力による白人との対決を選択したドレッドと、家族と安全な場所に逃げる道を選んだハリーとの対比が象徴的に描かれるのもこの空間においてである。二人は激しく口論するが折り合うことはない。その後、「ハリーは踵をかえし、ゆっくりと空き地の反対側に歩いて行った。そこでは、ティフ老人が、ファニー、テディ、リゾットらとともに、地面に火をおこし朝食の準備に余念がなかった。ドレッドは、自分の家へは向かわず茂みへと消えていった」（502）のである。『ドレッド』の副題が、『アンクル・トムの小屋』の表題同様、黒人奴隷の安らぎを象徴する場所の謂いだとすると、この場面は、ドレッドとハリーのその後を予兆する伏線として読むことができるだろう。

そのことをふまえたうえで検討すべきは、最初に言及した作品構成の不備、とりわけニーナのあっけない死の謎である。それについては先行研究でも諸説が提示されている。作品中、ニーナが近親相姦と関わりの深い詩人バイロンの本に言及していることを受け、兄弟のトムや、実は父親が黒人女性に産ませた異母兄弟であるハリーにとって「ニーナは性的な誘惑者であり、彼らを性的なくびきから解放するためには死ななければならない」（サジェ、163）とする説がある。だが、ニーナにはクレイトンという婚約者がおり、二人の兄弟が性的にニーナに迫る記述が一切ない以上、この説には無理がある。次に、ニーナの死因が猛威をふるうコレラ患者の看病中に自身が感染したことによるものであることをふまえ、そこに独特の意味を読みこむ見方もある。当時の南部で実際にコレラの大量発生があったらしいが、奴隷を虐待する白人主人トムが大量飲酒者でもあったことから、大量飲酒という病気とコレラをオーバーラップさせ、奴隷制という道徳的腐敗の体現者トムのメタファーとしてコレラを用いてニーナを殺したとするものである（ハミルトン、268）。トムの大量飲酒とコレラとの関連性が現実の物語展開において希薄である点が難点だろう。一方、ハリーが白人支配に反旗をひるがえしかけたときに、異母兄弟であるニーナを殺さなければならなくなるという悲劇を避けたとする意見もある（福岡、189）。しかし、ハリーがたとえ最後まで白人に反逆する道を選んでいたとしても、愛する妹ニーナを手にかけるというのは不自然だし、実際ハリーは「私は自分のことより妹を愛している。あの子のためなら最後まで戦うつもりだ。だが、妹やその家族を敵にして戦うことはない」（270）と断言さえしている。また、ニーナが体現する女性的、家庭的、情緒的価値に対して、後半前景化する婚約者の父親で判事のクレイトンが表す男性的、旧約的律法の価値観が最終的に支配する物語がこの作品だとする見方（フイットニー、556-57）も、ニーナの早すぎる死を説明する一つの方法かもしれない。だが、それでは、あとでさらに詳しくみるように、ストウの価値観にまったく相反することになり受け入れることはできない。

むしろもっと単純に考えると、『アンクル・トムの小屋』ですでに表現されていた奴隷制の根源的問題である幸せな家庭生活の破壊という主題を、ストウはニーナの物語を通して描きたかったのではないか。小説の始まりの部分では、ニーナは複数の男性をもてあそぶ軽薄な女性として登場していたが、やがて農園主人としての自覚が芽生え、黒人の置かれた状態への同情からコレラにかかった黒人たちを献身的に看病するにいたる。その彼女を背後で支えるのがよき理解者としての婚約者クレイトンだ。『アンクル・トムの小屋』では、イライザとジョージが家庭生活を回復したのとは対照的に、トムは愛する妻から引き離され悲劇の死を迎えなければならなかった。同様に、ハリー、ジョゼット夫妻がハッピーエンドを迎えるのとは逆に、婚約者クレイトンとの幸せな結婚を阻むことで、ニーナを奴隷物語の悲劇のヒロインとして描こうとしたストウの意図を想定することができるのではないか。それは、また、先に見た両作品の類似性、ストウの奴隷物語作家としてのスタンスの連続性を確認することにもつながるのである。

ストウの奴隷制批判に関しもう一点つけ加えておけば、ストウは、奴隷制が白人女性の家事を奴隷に任せることで、白人女性の「身体的および精神的堕落」（クライン、144）をもたらすと言う。家庭内のさまざまな仕事は女性にとっての神聖な義務だと考えるストウにとり、女性が家事を手放すことは精神的自殺に等しいとさえ言える。母子や夫婦の別離による幸せな家庭の崩壊にくわえ、奴隷制は白人女性の生活の意味すら奪う悪しき制度だととらえられているのである。ストウの考える家庭（domesticity）とはいかなる意味を持つのかについては最後にあらためて検討するが、奴隷物語の根本にドメスティシティの問題が潜んでいることは間違いないだろう。

奴隷物語がアメリカという国がかかえる社会問題を家庭のドラマに置きかえて表したものであるのに対し、禁酒物語は本来的に文字通り家庭崩壊の物語である。しかも、ストウにとって、奴隷制以上にパーソナルな色合いを帯びている点が特徴的である。第四子のフレデリックの飲酒についてストウが初めて懸念を示したのは1854年の手紙においてだった（ヘドリック、255）。その後、彼が16歳だった1856年頃から大量飲酒が問題となり始め、ストウの危惧したように南北戦争従軍体験でフレデリックの酒量が増大したため、ストウは大金をはたいて北フロリダに綿花農園を購入、息子に農作業に専念させることで一種の転地療養を施そうとする（328）。だが、彼は翌年農園を脱出しやむなく病院に強制収容されるが、最終的に、回復が絶望的であることを自覚した彼は、船乗りになって両親の前から永遠に姿を消すのである。フレデリックのアルコール問題は「死よりひどいこと（worse than death）」（ヘドリック、300）だと認識していたストウにとって、1856年から彼が失踪する1871年までの15年間、おそらくはその後の人生においても、大量飲酒の恐ろしさと悲惨さは決して他人事ではない痛切な問題であった。

もちろん、フレデリックの依存症が明らかになる以前からストウは禁酒物語に手をそめており、それには高名な禁酒運動家である父ライマン・ビーチャ―の影響が大きかったように思われる。フレデリックの依存症問題にストウが悩まされる以前の五作品と、その後書かれた作品にどのような違いが見られるのか。まずは、冷静にいわば第三者の立場から書かれた作品を概観しておこう。最初の作品「アンクル・イーノック」は、禁酒を説く牧師の説教に感動したある男が、禁酒活動への協力を求め署名を集めてまわるというのが骨子になっている。基本は道徳的説諭のパタンに則っているが、最後のオチ、すなわち、夫に従って署名した酒好きの女を評して「あの女が夜にならないうちに酒を飲んだとしてもわしは驚かんぞ。……女の酔っぱらいというものは、わしの知る二本足の生き物なかでもっともひどいものだ」(36) というコメントに見られるように、全体にユーモラスなタッチで描かれ、大量飲酒は深刻化していない。

第二作の「更生した酔いどれ」(1839)(『メイフラワー』所収のおり「自分のことは自分で」と改題、1843) は、「自分のことは自分で」を標榜する自由意志の信奉者エドワードと、過剰な禁酒運動を「不節制な節制運動 (intemperately temperate)」(159) と揶揄するオーガスタとの夫婦の物語である。社交の場に忍び寄る酒の脅威を「家庭の平和への最も深刻な危険 (deepest danger to domestic peace)」(162) と知りながら、エドワードの自己管理できるとの自信に任せ、結局、堕落の道を転げ落ち家族は離散、破滅寸前になって登場する人物によってなかば強制的に禁酒を強いられ救われるという筋書きである。しかし、救った男は、自分は「神のメッセンジャー」(178) に過ぎないと言い、エドワードも神の救いを実感する。酒により破滅する禁酒物語をデイヴィッド・レノルズは「暗い禁酒物語」(レノルズ、22) と呼び、シンシア・ハミルトンは「教訓型 (the cautionary)」(ハミルトン、262) と言う。逆に、最後に禁酒を実践し救いに至るドラマをレノルズは「伝統的 (conventional)」、ハミルトンは「模範型 (the exemplary)」とした。「更生した酔いどれ」が後者に属すものであることは明らかだが、それにしても、自由意志、外的強制、信仰による救済のモチーフが混在し、ストウの禁酒に対する立場は必ずしも明快ではなく (これは当時大量に出回った禁酒物語全般に見られる特徴でもあるが)、家庭の平安と飲酒の関係も掘り下げて考察はなされていない。

第三作「たった一杯のワイン、あるいは女たちよ、汝の息子を見よ」(1853) は、ラム、ブランデーなど蒸留酒はだめだが、ビール、ワインのような醸造酒はよしとする temperance (節酒) の字義どおりの初期禁酒物語 (運動) を踏襲している。さらに、男たちに酒を飲ませる主体が女性であること、および、他人のパーティの席でワインが出されたから右に倣えする女性たちを評し、「女性の最大の欠陥は慣習の奴隷 (slavery to custom) であることだ」(373) と批判するなど、禁酒問題にジェンダーの側面を持ち込んだところが特徴である。

「誰かの父親」(1853) は、T.S. アーサー編の禁酒物語集に寄稿した短い作品である。馬車の車窓から見た道端に寝そべる酔払いをみんなが笑い、それに同調した子供を、母親が、あのひ

とも誰かの父親かもしれない、憐みをもちなさいと諭す話である。アルコールの誘惑に負けた男の家族の悲惨さが語られる「教訓型」禁酒物語で、「家族の聖なる関係を守るため」(244)救いの手を差し出そうではないかと結ぶ最後は、お決まりの説教調で、ストウの創作欲が書かせたというより、教条的作品を提供することで禁酒作家としての義理を果したという印象が強い。

それに比べると、同年の「サンゴの指輪」は、禁酒物語作者として名高いルシアス・サージェントの代表作『禁酒物語集』(1852)の巻頭をかざる「母の指輪」に似た物語性の強い作品である。プロットは、良家の娘フローレンスが、将来を嘱望されながら酒で身を滅ぼしかける若いエリオットを、自分たちを中世の騎士と想い姫の関係に見立て、禁酒の誓を立てさせることで救うというものだが、注目すべき第一点は、フローレンスの造形である。彼女は富と美貌と才気に恵まれながら「これまで自分のためにのみ生きてきた」(382)、どちらかというと軽薄な生活態度のお嬢様という設定である。その彼女が自分の力に目覚め、積極的に他者と関わる姿勢を見せるプロットは、三年後、『ドレッド』に登場するニーナを思わせる。

第二点は、上記とも関係するが、彼女がエリオット救済に乗り出すきっかけが年長のいとこエドワードの言葉だったことだ。自分でエリオットに注意したらと言われたエドワードは自分ではだめなのだ、「君のような女性のもつ友人への影響力」(378)こそが必要であり、「今まで賢い男たちを惑わして馬鹿なことをさせてきたのだから、ここらで馬鹿な男一人くらい、君の魅力でもって賢い行為をさせてはどうだ」(382)と挑発し、彼女の重い腰をあげさせる。精神面、とくに道徳的側面における指導力こそ、家庭にあって女性の本領が発揮される重要な力だということはストウの基本的認識であったと思われる。だが、ここでは「影響者(influencer)」という設定に注目したい。ストウは1867年、娘たちに書き送った手紙の中でフレデリックの飲酒問題にふれ、若い男とは誘惑に負けやすいもので、「あなたがた(女)が男の高貴な性質を呼びさまし、よい行いをするよう影響を与えなければいけない」(ケリー、35)と言っている。「サンゴの指輪」執筆から15年たったのちも、女性が男に影響を及ぼす存在、すなわち「影響者」だという認識は強く、そのことは、それが一過性の思いつきでなかったことの何よりの証左だろう。

以上の五つの短編が、フレデリックの飲酒問題が発覚する以前に書かれたものである。ストウが物語化にあたりすでにみた様々なアプローチを試みているところに、逆に、禁酒問題に対する冷静さと客観性が感じられさえする。ところが、ストウはその後、論者の知る限り禁酒物語には手をつけず、最後の作品「ベティのすばらしい考え」まで20年以上の空白がある。これはどうしてだろうか。

この作品の主人公は、フローレンスという「サンゴの指輪」の主人公と同名で似通った境遇の若い娘である。その彼女が毎年のクリスマスのプレゼントの交換に飽き、何か違ったことを

したいという贅沢な悩みを奉公人のベティに打ち明ける。するとベティは、飲酒が原因でかつてフローレンスの父に庭師をくびにされ、そのため貧困にあえぐモーレイ一家を救済してはどうかとの「すばらしい考え」を提案、そして、フローレンスが「影響者」となり働きかけた結果、父親は改心したモーレイをふたたび雇用し、一家はもとの平安を取り戻すというプロットである。だが、根本問題である大量飲酒については、モーレイ自身、神の声を聞いて改心するという設定になっているうえに、物語の冒頭から、「輝けるもの（the Shining One）」という神的な存在が一家を見守り続けるように終始宗教的色彩が強い。モーレイの家族も不幸な境遇にありながら、希望を失わず懸命に生きている。母親はわずかの賃金を得るため日夜内職に没頭し、幼い子供たちは、親切な寺男にもらった古い十字架や木の枝などで粗末な家を飾り母を喜ばそうとする。最後の場面では、フローレンスが提供する新しい服に身を包んだ子供たちと食卓に並んだご馳走を前にしたモーレイ家の「家庭の平和（domestic peace）」の再現が典型的な形で示される。この作品には大量飲酒のもたらす醜い場面や堕落の描写はない。道徳的説諭、外的強制など、これまでストウが用いてきた禁酒物語の定番のモチーフはなく、神の思し召しと周囲の人間の善意がハッピーエンドをもたらすというファンタジー仕立ての展開が目を引くのである。こうした、やや現実離れした筋書きに、ストウの息子フレデリックへの思い、彼の帰還を祈願するストウのはかない望みを読み取ることはできないだろうか。

その点に関し興味深いエピソードがある。1869年、ストウは応援していた後輩作家レベッカ・ハーディング・デイビスに手紙を送っている。当時デイビスは雑誌に禁酒物語を連載中で、ストウはそれを「とてつもなく痛切な関心をもって（with intense and painful interest）」（ヘドリック、336）読んでいる旨を彼女に告げている。ただし、それを完全な悲劇にしてしまうのだけはやめてもらいたいとストウは言う。「わたしたちを恐ろしいほど怖がらすのは結構、でも、わたしたちをまったくだめにするのはやめてください（Frighten us dreadfully but don't quite kill us.）」とほとんど懇願口調で訴えているのだ。フレデリックのアルコール問題ゆえに禁酒物語を書けなくなったストウの、現実直視を避け、家族の安寧のハッピーエンドという幻想にしがみつきたい思いが、デイビスへの反応と、「ベティのすばらしい考え」という最後の禁酒物語創造に集約されているのではないだろうか。

次に女性物語に目を転じよう。女性を巡る様々な抑圧からの解放に関して、ストウは自らの問題として深い関心を寄せていた。家庭を守るべき主婦の責任と作家稼業の両立、結婚生活、とりわけ性をめぐる夫との闘争等については、ヘドリックの伝記に詳しく書かれている。バイロンの近親相姦不倫スキャンダルでバイロン夫人に肩入れしたストウが書いた「バイロン夫人の人生の真実」（1869）を評して、ヘドリックは「『アンクル・トムの小屋』の女性性奴隷版」（356）と呼んだ。また、翌年出された『バイロン夫人擁護論』を、ストウが問題を一般化し、

女性自らが隷属状態を内在化している現状を告発した書だとする意見もある（グレアム、176）。

ストウは女性参政権、社会進出に賛成しており、エリザベス・スタントンと良好な関係を保っていた時期もある。だが、ストウが、結局、スタントンやスーザン・アンソニーらのフェミニズムと関われなかったのは、ストウが「記録に残っている最古で、もっとも尊いキリスト者の結びつき」（『妻とわたし』、ｘ）と称した結婚についての思いが、離婚を推奨するスタントンらの運動と相容れないものであったことによる。また、女性の権利よりむしろ義務を重視し、主婦の仕事を「専門職（profession）」とみなしたストウが、家事を「家庭の雑役」と呼んだ女性活動家に反発を感じたのかもしれない（イーストン-フレイク、38）。

したがって、ストウの女性物語は、家庭、とくに結婚を中心主題として展開する。ところが、意外にも、女性物語の主人公たちは抑圧され解放を求める状態にはなく、みな家庭という女性の領域をのびのび生きている。むしろ、そこにストウの考える女性の生き方の理想像が示されており、現実に女性の置かれた立場に対するストウの認識と反発の声が聞きとれるとも言えるだろう。たとえば、『牧師の求愛』（1859）の主人公メアリーは、恋人の死の知らせを聞き、母の説得で高潔な下宿人の牧師と婚約するが、恋人が生還したことにより彼女の心は揺れる。だが、婚約解消は倫理上できないと牧師との結婚を選ぶものの、結局、牧師が身をひき、最後はめでたく恋人と結ばれるという話である。メアリーの新婚家庭を紹介する最終章の記述はこう書かれている。

> 詩のように美しい娘、先を見通す力をそなえた聖者が入ったのは、女性のために与えられた社、修道院より神聖にして、教会や祭壇より気高く純粋な場所―キリスト者の家なのだ。女司祭、妻、そして母として、彼女は家庭の平穏を守る聖なる任務を日々つかさどる。そして、信仰と祈りと愛でもって、毎日の生活に必要な仕事が、粗野で世俗なものに堕することから救い出す。（326）

キリスト教信仰と家庭第一主義のストウにしてみれば、メアリーを家庭という聖なる空間を統べる聖職者のイメージで描きだすこの典型的な家庭像に理想の姿を見出したのも無理はない。しかも、皮肉なことに、小説の表題に現れる牧師は、作品中ほとんど自室にとじこもり、ハッピーエンドの相手の恋人の登場場面は最初と最後だけといった具合に、男性の存在感が徹底してそぎ落されている。反対にメアリーをとりまく女性陣はみな印象的だ。なかでも奴隷として家事を任され、のちに解放されるキャンダシーが、教会執事から、女とは弱い存在だから夫を敬えと諭される場面で、日常のすべての面倒を見ている自分あっての夫ではないかと滔々とまくしたてる様子を、「女性の権利のための集会が一日がかりでも、あの（＝キャンダシー）表情と言葉ほど表現しきれなかっただろう」（105）と述べるあたりは、まさに「公的」（public）

ならぬ「家庭内フェミニズム（domestic feminism）」（スミス、53）の発露であるとも言えるだろう。この作品に「根源的なフェミニスト的性格」（ハリス、197）を認める研究者がいるのも、女性優位、というより、ほとんど女性たちが女性たちのためにあれこれ考え行動することで物語が進むこの作品の女性物語の本質に反応した結果であるのかもしれない。

二人の男性が一人の女性を愛す三角関係が『牧師の求愛』ならば、『オア島の真珠』（1862）は、一人の男性を巡る二人の女性の三角関係の話である。ともに孤児のマラとモーゼズは、兄弟のように育ちながら、やがて恋におち、しかし、マラは病気で夭折、のちにマラの親友サリーがモーゼズと結婚するという物語である。作品冒頭から女性優位が顕著であって、海難事故でマラの祖父母に引き取られることになったモーゼズを彼女は「新しい収穫（new acquisition）」（59）「絶対的に自分ひとりのもの（something exclusively her own）」（195）と呼んで面倒をみようとする。「神があなたをわたしに送ってくださった。永遠にわたしのものになるべく」（322）と彼女が言うように、マラのモーゼズへの思いには神が介在していて、近代的恋愛物語を期待する向きには現実味に欠ける印象は否めない。一方、サリーはマラとは対照的に世俗性を帯びた女性の設定で、はじめは遊び半分に三角関係の一角を占めようとする。しかし、死を前にしたマラの思いを知ったサリーは、その遺志をうけつぎモーゼズと真剣な愛を育む決意を固めるというハッピーエンディングでまとめられている。

そうした女性優位のプロットに、異性婚批判と女性（マラ、サリー）による男（モーゼズ）の交換の構造を読み込む見方がある（バネット）。興味深い視点だが、マラがサリーにモーゼズを託していると読める場面は短く、しかもサリーははっきりと受託しているわけではない。海に出ていたモーゼズがサリーの許を久しぶりに訪れたとき、「自分の家がもちたい」（400）と切り出したのは彼の方であった。また、サリーの方が家事（home keeping）が上手だとの伏線はすでに作品のはじめの方ではられていたのだ。

ただし、女の実力と連帯という点が書き込まれていることはまちがいがない。海という外部の男の世界を誇示するモーゼズだが、マラの前に出ると、とたんに腰砕けになって「ぼくは（君には）ふさわしくない（I am unworthy）」という言葉を何度も繰り返したかと思うと、マラにすげなくされたためサリーにすり寄るなど優柔不断な態度を示すのである。神から授かったモーゼズを幸せにするためサリーと結びつけようとするマラは、最終的にすべてを差配する存在である。他方、サリーはマラとは対照的に世俗的ながら、最後にモーゼズと結婚して現実に幸せな家庭を築くに至る。ストウは理想の女性像を、マラ（超俗）とサリー（世俗）という二人の女性を通して描いていたとも考えられるのである。そして、これまでの作品がそうであったように、主役の二人の女性の周囲に多くの女性の存在があり、この作品ではとりわけリュイとロクシーという名の二人の「叔母」が、ときには励まし、ときにはともに悲しみながらマラを導いていく。そんな彼女たちをストウは、「こうした広く有益な人たちを暗黙の合意

のもとで「叔母（Aunt）」の肩書で呼ぶのだ。そうすることで、彼女たちを人類という大家族へ結びつける強い絆を示すことができる」（18）と書く。家族の結びつきに徹底的にこだわったストウらしい言い回しであろう。

上記二作品で、男性による女性の抑圧と思しきものは、『牧師の求愛』では、ジェイムズが海難事故で死んだと思われたとき、「悔い改め」を経ておらず、したがって地獄に落ちるのではないかとジェイムズの母が思い悩み精神を病む様子がそれである。男性牧師によって説かれるカルヴィン派の怒れる神の抑圧が、特に敬虔な女性信者を強固に縛りつけていたニューイングランド特有の状況が描かれている。しかも、これにはストウの伝記的事実が関与している。ストウは1857年、長男ヘンリーを９歳で水死させているが、そのとき、息子が悔い改めをしないまま亡くなったのではないかという思いがストウを苦しめる。その苦しみは、姉キャサリンが35年前、婚約者を若くして亡くしたときに抱いた疑問と同じだったことで、いっそう痛切なものになったという（ヘドリック、276）。だが、作品中の女たちは、その抑圧を跳ねとばす力を発揮する。ここでも、その主役はキャンダシーだ。ジェイムズの母が、「絶望の奈落（pit of despair）」（199）から神不信に陥ったところ、「可哀そうな子羊さん、キャンダシーのところに来なせえ」とその胸に抱きかかえ、ともに「癒しの涙にむせぶ（healing sobs and tears）」（201）ことでカタルシスをもたらしている。

『オア島の真珠』では、「彼（モーゼズ）は、なんといっても男の子だし、やがて立派な大人の男になって世界の海をかけめぐるだろう。一方、彼女（マラ）は、家でハンカチの縁を縫ったり、靴下を編んだりしながら、ただ彼の帰りを待つことになるだろう」（149）とあるように、男と女の領域が整然と区別されている。しかし、この小説は、あくまで「オア島」の物語であって、外部世界はときおり言及される補助的な役割しか持たされていない。一見、傲慢にふるまうモーゼズも、すでにみたように、結局、マラとサリーの言うがままに行動する脇役なのだ。

女性の領域でたくましく生きる女性の姿を描くことが、上記二作品であるとしたなら、そこから発展し、男の領域への女性の進出と、男女の共同作業による家庭の構築というテーマを盛り込んだものが、『妻とわたし』とその続編『われわれと隣人たち』である。ニューイングランドものが、海辺の小さな集落で伝統的な生活を支える女性たちの「能力（faculty）」、すなわち、「美、富、学識、いや、いかなる世俗的資質より、鋭敏なひとたちのあいだで、より尊ばれる天与の才」（『牧師の求愛』、３）を称揚するものだとすると、ニューヨークものは、舞台が大都会であり、時代的にも近代化の進んだ状況を描いており、男女の関係も変質を迫られる。

『妻とわたし』『われわれと隣人たち』は、前者がエヴァとハリーの結婚を、後者が、二人の周囲にいる男女の交渉と、その中の二組の男女が結ばれる経緯を語る婚姻物語であるが、これまでのストウ作品には珍しいタイプの人物として、結婚制度から除外された女性、エヴァの姉

アイダと、ハリーのいとこキャロラインがいる。アイダは結婚を画策する周囲の意向を無視して女性として自立した生活を選び、キャロラインも好きな男との幸せな家庭生活をあきらめ、パリで医学の勉強を志す。ところが残念なことに、ストウは、自立を決意して以降の二人のその後に関しては寡黙であり、続編に至ってはほとんど言及されることもない。家庭という女性の領域を飛び出し自己実現をはかる女性像を作り出したことは、ストウがたとえば姉キャサリンより女性の生き方の多様性を認めていたことを示唆しているが、スタントンら尖鋭的なフェミニストとストウのあいだには、女性の「解放」に関してやはり越えがたい溝があることは否めない。

むしろ、家庭を築く際の男女の関係性に微妙な変化が生じていることに注目すべきだろう。主人公のエヴァは、それまでの女性物語に登場する女性たちと違い「能力」を持ち合わせない。生産の場である台所は使用人という他人に明け渡し、自分は居間で夫婦や友人たちとの社交という消費活動に明け暮れる。彼女の金（資本）と使用人たちの作業（労働）の場が区別され（クライン、286）、いわば資本主義が家庭内に侵入しているとも言えるだろう。ストウの女性物語に関しては、ニューイングランドものが評価され、後期のニューヨークものが概して低い評価しか与えられないことは、近代化にともなう家庭生活の変化が背景にあり、基本的に前近代のニューイングランドの生活を理想としていたと思われるストウのノスタルジックな視線が共感を呼ぶことと大いに関係しているものと思われる。

とはいうものの、ストウの家庭構築に対する思い入れにぶれはなく、むしろ、今まで以上に理想化されたものとなっている。妻を聖職者のイメージでとらえる立場に変わりはなく、それに加えて、家は妻の人格を示すもので、画家の描いた絵と同じく妻の個性の発露であるという（『われわれと隣人たち』、142）。さらには、「家とは妻の玉座であり、帝国である」（142）などと世俗の権威づけまでされるようになる。興味深いことに、その際、ハリーとエヴァは二人の共同作業の結果、理想の家庭が築けたことが強調されており、「ハリーが国王、エヴァが女王として領土（dominion）を統治するのだ」（『妻とわたし』、400-401）やら、「私たちは、私たちが目にするものすべての君主（monarch）なのだ」（447）とも書かれている。晴れて結婚にこぎつけた新婚カップルの高揚した気持ちが語らせたものではあろうが、イメージの肥大化はすさまじい。

しかも、ここにはさらにもうひとつのひねりがある。「真の妻とは夫にとって母親になるのだ。すなわち、最良の方法で夫を導き、世話をし、教え、試問する（catechize）のだ」とストウは言う（『妻とわたし』、98）。それは、あたかも、イエスが弟子のファミリー（family of disciples）を通じて世界に働きかけたように、夫を通じて世の中に間接的影響力を発揮することを意味する。ストウは、母親の影響力（mother-influences）（『妻とわたし』、36）に絶対の信頼をおいていたようであり、それは異なる背景をもった者のあいだをとりもち愛によって融

和する神的力であり、美徳を高める教育的力であり、また、誤った者を浄化する贖いの力でもある。当該部分は直接的には子供への接し方について書かれた部分だが、それが全般的な妻＝母の持つ力を表明したものであることは明白だろう。ストウは、また、「家というものは、自分自身だけのものであってはならない」とも言う。なぜなら「それは、あらゆる方面に手をさしのべ、他人を助け、庇護し、安らげるものだから」（『われわれと隣人たち』、442）。ドメスティックな空間への徹底したこだわりが逆説的に社会とつながるというのが、ストウの信念だったのである。

このようなストウの女性物語をどう読むかについては意見の分かれるところであろう。家庭内にとどまることで、最終的に社会全体を変える力を及ぼすとはいうものの、それでは結局「真の女性（true womanhood）」の美徳を説くだけであって、ストウの初期の作品に見られた生き生きした女性像からの撤退ではないかとする見方もある（ドノヴァン、154）。他方、家庭と社会の二分法を乗り越え、多様な女性の生き方を模索するしたたかな戦略、いわば「多元性の力（power of pluralism）」（イーストン-フレイク、59）を示したものとして評価する意見もある。ことは、要するに、「家庭内フェミニズム」をどう評価するかということにもなってくるが、その判断はおくとして、ここではストウの徹底したドメスティシティへのこだわりを再度、確認しておきたい。

ここまで、ストウの「解放」のディスクールにつき、三つのジャンルを通じて考察してきたが、そのいずれにも、彼女の家庭（ドメスティシティ）に寄せる強い思いがあった。そこで、最後に、ストウの抱く理想の家庭像とは何かという問題を、彼女のエッセイを材料に整理しておきたい。まず、その宗教性については、再三、指摘してきた。家庭とは、「天国にもっとも近いもの」（『家事に関するエッセイ』、54）とストウは言い、家事を「聖なる義務」と呼ぶところは随所に見られる（たとえば、『ストウ読本』、453、『アメリカ女性の家』、19）。小説中で、妻を家という聖なる空間を統べる聖職者と表現していたことと同一の発想であって、いかにも宗教一家に生まれ育ち、みずからも福音主義を信奉する敬虔なクリスチャンであるストウらしい。

第二に、その宗教的なレトリックにまじって世俗の発想が見え隠れする点は見逃せない。さきほど引用した「家事という聖なる義務」という一節は、原文では、“sacred duties of the family state”と表現されている。“family state”とは、「家庭の状況」とも「家庭という国家」とも訳せ、家庭と国家とが限りなく重なっている。実は、1865年に『アトランティック・マンスリー』誌に寄稿した女性問題をめぐるエッセイで、ストウは、「国家とは家庭を拡大したものにすぎない（A state is but a larger family）」（ボイドストン、268）と述べている。また、『妻とわたし』の中で、「国家とは家族の集合体（collection）以上でも以下でもない」（36）と

主人公に語らせているのは、その発想の延長上にあると言っていいだろう。

これを政治的と呼べるかどうかは別として、ストウが家庭と社会（国家）の二分法に単純に拠っていなかったことは間違いない。すでにふれたように、妻は同時に母でもあり、夫（子）への影響力で社会に変革をもたらすという遠大な発想をストウは持っていた。そのことを如実に示すエッセイを、彼女は、同年、同じ雑誌に載せた記事で披露している。

> *影響*は権威よりゆっくりとした行動です。それは弱いように見えますが、長期的には、しばしば、より効果的なのです。やさしく変革する力を欠いたたんなる強制や権威より、いつも、よりよく働くのです。（『ストウ読本』、513）

「影響者」のモチーフに強いこだわりを見せたストウの文学活動についてはすでにみてきたが、それは、同時に、ストウの家庭経営、子育てにおける持論でもあったのである。

宗教的、精神的な側面に対し、社会への働きかけという広い意味での政治性をあわせもったところに、ストウのドメスティシティの特徴があるが、それだけではない。『家事に関するエッセイ』のなかの「家庭とは何か」と題された記事で、ストウは理想の家庭を構成する要素として愛、自由、もてなし（hospitality）、慈悲（charity）の四つをあげている。そうしたうえで、別のエッセイでは、理想の家庭には「妖精」が棲むという表現をする。「部屋や家全体の雰囲気と思われる、安全、落ち着き、楽しみというあのきわだった感情（peculiar feeling）の多くは、間違いなく、こうした小さな人々、すなわち妖精の存在に由来する」（10-11）と言い、そして、「妖精が部屋を立ち去ると、だれもそこではくつろげない（feel at home）」（16）とも言っている。男性ペルソナの口から出た言葉だが、ストウ自身の本音とみなしていいだろう。この、いわば、情緒的な発想が、ストウの家庭論の随所に見られるのだ。だが、反面、ストウの家庭経営への取り組みはきわめて実際的でもある。もとより、ストウは家事を「専門職（professional）」（269）とみなしていたし、なにより姉キャサリンとの共著、『アメリカ女性の家』を読めば、いかにストウが、部屋のデザインから、暖房・換気システム、食べ物の調達と調理、衣服、家畜・菜園の世話、家族・使用人の健康等のケアーに至るまで、家庭生活全般にわたり広範な知識と気遣いが重要であるかを科学的に考慮していたかが分かる。『アメリカ女性の家』は、まさに家庭経営の実践的マニュアル本とも言える。それゆえ、そうした知識を体系的に教える女子教育の必要を訴え、かつ実践していたストウの情熱が理解されるのである。

もっとも、作家として地位を築いてからのストウは、執筆時間を捻出するため、家事を任せる下働きの女性をやとい、おかげで家事労働という「雑事（drudgery）」から逃れられた旨を、友人への手紙に記している。「わたしはたんなる家事奴隷（mere domestic slave）にならないことに決意しました。わたしの義務たる仕事で抜きんでたことをする暇もない奴隷にはね」

（クライン、144）。「わたしの義務」とは執筆活動を指しているが、皮肉な見方をすれば、ストウは、子供の教育と使用人の管理以外の家事は、「聖なる義務」ではない「雑務」であって、プロフェッショナルな女性がタッチする必要のない作業と考えているともとれる。ここには女性の中の階層化が生じており、ニューイングランド中流家庭出身の比較的めぐまれた環境にあったストウの限界が露呈していると言えるのかもしれない。

いずれにせよ、ストウの文学的営為を見渡したとき、宗教的、政治的、感傷的、実際的といった多面性をはらみながらも、ストウの原点に、理想の家庭構築への強い意欲がつねに存在しており、それが、彼女の「解放」言説の駆動力となっていたことは間違いない。まさにドメスティシティこそ、ストウ文学の中核を担う概念だったのである。

＊本稿は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）による基盤研究（C）「19世紀アメリカ禁酒小説/運動におけるジェンダーギャップの研究」（課題番号15K02338）の成果の一部である。

参考文献

Adams, John R. *Harriet Beecher Stowe*. Boston: Twayne Publishers. 1989.

Bannett, Nina. “Keepsakes, Promises, Exchange: Female Friendship in Harriet Beecher Stowe’s *The Pearl of Orr’s Island*.” *The New England Quarterly*, Vol.LXXXVII. No.3 (September 2014).

Blumberg, Leonard U. *Beware the First Drink*. Seattle: Glen Abbey Books. 1991.

Boydston, Jeanne, Mary Kelly and Anne Margolis. Eds. *The Limits of Sisterhood: The Beecher Sisters on Women’s Rights and Women’s Sphere*. Chapel Hill: U of North Carolina Press. 1988.

Crozier, Alice. *The Novels of Harriet Beecher Stowe*. New York: Oxford UP. 1969.

Donovan, Josephine. “Harriet Beecher Stowe’s Feminism.” *American Transcendental Quarterly*. 47-48. 1980.

Easton-Flake, Amy. “Harriet Beecher Stowe’s Multifaceted Response to the Nineteenth-Century Woman Question.” *The New England Quarterly,* Vol.LXXXVI, No.1 (March 2013).

Graham, T. Austin. “The Slaveries of Sex, Race, and the Mind: Harriet Beecher Stowe’s Lady Byron Vindicated.” *New Literary History*. Vol.41. No.1 (Winter 2010).

Hamilton, Cynthia S. “ “Dred”: Intemperate Slavery.” *Journal of American Studies*. Vol.34. No.2 (August 2000).

Harris, Susan K. “The Female Imagery in Harriet Beecher Stowe’s The Minister’s Wooing.” *The New England Quarterly*. Vol.LXVI. No.2 (June 1993).

Hersh, Blanche Glassman. *The Slavery of Sex: Feminist-Abolitionist in America*. Urbana: U of Illinois Press. 1978.

Kelly, Mary. “At War with Herself: Harriet Beecher Stowe as Woman in Conflict within the Home.” *American Studies*. Vol.19. No.2 (Fall 1978).

Klein, Rachel Naomi. “Harriet Beecher Stowe and the Domestication of Free Labor Ideology.” *Legacy*. Vol.18. No.2. 2001.

Kuhn, Mary. “Garden Variety: Botany and Multiplicity in Harriet Beecher Stowe’s Abolitionism.” *American Literature*. Vol.87. No.3 (September 2015).

Levine, Robert S. Introduction to *Dred: A Tale of Dismal Swamp*. Chapel Hill: U of North Carolina Press. 2000.

Reynolds, David S. and Debra J. Rosenthal. Eds. *The Serpent in the Cup*. Amherst: U of Massachusetts Press. 1997.

Rorabaugh, W.J. *The Alcoholic Republic*. New York: Oxford UP. 1979.

Saje, Natasha. “Open Coffins and a Sealed Books: The Death of the Coquette in Harriet Beecher Stowe’s Dred.” *Legacy*. Vol.15. No.2. 1998.

Smith, Daniel Scott. “Family Limitation, Sexual Control, and Domestic Feminism in Victorian America.” *Feminist Studies*. Vol.1 No.3 (Winter-Spring 1973).

Stowe, Charles Edward, and Lyman Beecher Stowe. *Harriet Beecher Stowe: The Story of Her Life*. Boston: Houghton Mifflin. 1911.

Stowe, Harriet Beecher. “Uncle Enock.” (1835) Hedrick, Joan D. Ed. *The Oxford Harriet Beecher Stowe Reader*. New York: Oxford UP. 1999.

——“The Drunkards Reclaimed.” (1839) Rpt. “Let Everyman Mind His Own Business.” *The Mayflower*. Boston: Phillips, Sampson, and Company. 1855.

——*Uncle Tom’s Cabin or , Life Among the Lowly*. (1852) New York: Norton. 1994.

——“Only A Glass of Wine, or, Women Behold Thy Son.” (1853) *The Mayflower*. Boston: Phillips, Sampson, and Company. 1855.

——“Somebody’s Father.” (1853) Timothy Shay Arthur ed. *The Temperance Offering*. New York: A. I. Holmes. 1871.

——“The Coral Ring.” (1853) *Stories, Sketches, and Studies (The Writings of Harriet Beecher Stowe Vol. XIV)*. Cambridge: Phillips, Sampson, and Company. 1855.

——*Dred: A Tale of Dismal Swamp* (1856). Chapel Hill: U. of North Carolina Press 2000.

——*The Minister’s Wooing* (1859). New York: Penguin Books. 1999.

——*The Pearl of Orr’s Island*. Boston: Houghton Mifflin. 1862.

——*Household Papers and Stories*. Boston: Houghton Mifflin. 1865.

——and Catherine E. Beecher. *The American Woman’s Home* (1869). New Brunswick: Rutgers UP. 2002.

——*MY Wife and I* (1871). New York: AMS Press. 1967.

——*We and Our Neighbors* (1875). New York: AMS Press. 1967.

——"Betty's Brightest Idea." (1876) *Stories, Sketches, and Studies (The Writings of Harriet Beecher Stowe Vol.XIV)*. Cambridge: Phillips, Sampson, and Company. 1855.

Whitney, Lisa. "In the Shadow of Uncle Tom's Cabin: Stowe's Vision from the Great Dismal Swamp." *The New England Quarterly*. Vol.66. No.4 (December 1993).

福岡和子『「他者」で読むアメリカン・ルネッサンス』世界思想社、2007。

森岡裕一「ボトルと奴隷―『アンクル・トムの小屋』における支配と依存―」山下昇編『メディアと文学が表象するアメリカ』英宝社、2009。

——「リグリーの怯え―『アンクル・トムの小屋』における男女の力学―」『英米文学の可能性：玉井暲教授退職記念論文集』英宝社、2010。

（もりおか・ゆういち　外国語学部教授）